# パミール高原学術調査概要：フンザの社会変容1973-1993

松沢哲郎
京都大学霊長類研究所

パキスタン・中国・アフガニスタンの3国の国境近くにあるフンザからクンジェラブ峠を越えてカシュガルまで旅した。峠の南北の辺境の住民、フンザとキルギスの人々を対象に、ライフコースと環境適応の多角的な調査をおこなった。主たる調査地であるフンザは、筆者個人にとってはちょうど20年ぶりの再訪であり、この間の社会変容の実態を把握した。カラコルム・ハイウエイという交易道路が開通し、水力発電ダムができて電灯がともり、多数の観光客が訪れるようになり、人々の暮らしは大きく変化していた。20年間で変化したものと変化しなかったものに焦点をあててみたい。

## 1 調査の目的

京都大学ヒマラヤ医学学術研究計画（KUMREH）と呼ぶ長期継続の野外研究プロジェクトを推進してきた（松沢・松林、1991；松林ほか、1994ab）。本稿は、その第9次隊（パミール隊）として、ヒマラヤ高所住民のライフコースと環境適応にかんする調査をおこなった、その概要を報告する。

1989年に始まったＫＵＭＲＥＨのプロジェクトでは、これまで2回にわたって、フンザ地域で老化・加齢変化を中心とした医学調査を展開してきた。1991年夏の第5次隊（松林、1992；高知医科大学フィールド医学研究会、1992）と、1992年夏の第6次隊（奥宮、1993）である。

今回1993年の調査では、1991・92年の医学調査とは違った観点から、ヒマラヤ辺境住民のライフコースと環境適応に焦点をあてたいと考えた。すなわち医学研究のように人間の生理的な適応のメカニズムに焦点をあてるのではなく、暮らしぶりの全般をとおして見えてくる、人々の生きざまをクローズアップしたいと考えた。

北アメリカのアーミッシュでも、西アフリカのマノンでも、ユーラシア内陸部のチベッタンでも、ヒトはそれぞれの自然環境に適応したくらしを営んでいる。しかし自然環境だけではない。それぞれの社会には、歴史的背景があり、国というような社会制度上の制約をもっている。ヒトは地域によって違った暮らしを営んでいるが、環境に個々人が生理的に適応する以上に、集団としてそれぞれの社会が文化的に適応している。

では、そうした文化的な多様性はどのように維持されているのか。民族とは何か。エスニシティーの社会学についてはすでにすぐれた総説がいくつか書かれている（川田・福井、1988；梶田、1988；綾部、1993；中野・今津、1993）。本稿では、社会学というよりも、環境適応という視点からの生態学的アプローチを構想した。すなわち、それぞれの社会集団における、(1)環境適応の結果としての文化の実態を把握し、(2)文化的アイデンティティーを支えるメカニズムについて考察する、それが今回の調査の目的である。

調査の背景に少し言及したい。筆者は1973年にパキスタン側から北上してフンザにはいった（松沢・高木、1973）。さらに1989年には、クンジェラブ峠をはさんで北に位置するカシュガル周辺へ、中国の新疆ウイグル自治区をウルムチから南下して行った（松沢、1990）。ユーラシア大陸の最奥部パミール高原とその周辺部に、南北からアプローチしたことになる。自然環境でいえば、海から最も遠く離れた内陸の極地である。気温の日格差が大きい。政治的にはパキスタン・アフガニスタン・中国の3国の国境地帯であり、ロシアと

インドの国境にも近い。

この内陸の乾燥した山岳地帯を生活の場とする人々がいる。その中でも、パキスタンと中国の国境クンジェラブ峠の南に住むフンザの人々（フンザクートあるいはブルーショーと呼ばれるフンザ・ナガール地区の人々と、フンザ川上流部のゴジャール地区に住むワーヒー、月原1993参照）と、峠の北側に住むキルギスの人々である。かれらはそれぞれの国で少数民族として、文化的なアイデンティティーを保った暮らしをしている。

20年ぶりに会うフンザの人々。ラクダで遊牧する姿をかいまみて感動したキルギスの人々。そして、まだ通過していない中パ国境。国境の南と北で各10日間、異文化に暮らす人々の日常を見聞し、かつてのシルクロードを西南から東北に縦断する。それが今回の旅の基本計画になった。

ルートとしては、第５次隊（松林公蔵隊長）とほぼ同じである。古来のシルクロードのひとつとして数多くトレースされており、紀行などの記録も少なくない（日本・パキスタン協会、1994；Philipe, 1955）

## 2　調査隊の構成

今回の調査は、堀了平を研究代表者とする文部省科学研究費による海外学術調査である。隊の構成は以下のとおりだった。

松沢哲郎（42）京都大学霊長類研究所教授。理博。心理学、霊長類学。隊長、Ａ班。

高井正成（31）京都大学霊長類研究所助手。理博。古生物学、形質人類学。事務長、Ｂ班

堀了平（62）京都大学名誉教授、近畿大学教授。医博。薬学。顧問、Ａ班。

中島道郎（62）大阪府済生会病院泉尾病院副院長、医博。呼吸器病学、高所医学。Ａ班。

辻本雅史（43）甲南女子大学人間関係学科教授。文博。教育学、教育史学。Ｃ班。

成瀬哲生（44）山梨大学教育学部教授。文博。中国文学。

池上哲司（44）大谷大学文学部教授。文博。倫理学、ドイツ哲学。Ｃ班。

中谷真憲（24）京都大学法学部大学院生。政治文化論。Ｃ班。

松野昌展（24）日本大学松戸歯学部大学院生。歯科医。Ｂ班。

川崎公男（24）京都大学医学部５回生。医学部生。Ｃ班。

レイハン（30）甲南女子大学教育学専攻。大学院生。教育学、視聴覚教育。Ｃ班。

（以上１１名、ＡＢＣは調査旅行の班を示す）

## 3　調査隊の旅行概要

中国側の旅程を現地参加したレイハンを除き、調査隊10名は、７月31日に全員同時に成田を出発し、フンザに向かった。フンザでは、パス村で登山班と調査班の２班に別れて行動した。パス村以降は再び同一行動でクンジェラブ峠を越えて、キルギス人の放牧地ジュンブラックに到った。ここからＡＢＣの３班に別れて帰国した。Ｃ班はフンザと対応するかたちで、キルギス・カシュガルの調査をおこなった。行動記録は以下のとおり。

７月31日　成田発、マニラ・バンコク経由。
８月１日　カラチ着。国内線でイスラマバードへ。
８月２日　陸路、専用マイクロバスでチラスへ。
８月３日　フンザの中心地、カリマバードへ。
８月４日　フンザの北限の村パス（2400m）へ。
８月５日　１０日まで２班に別れて行動した。
登山班：パス氷河踏査・シスパーレ峰偵察。
調査班：フンザ各村の学校教育などの調査。

以下に登山班の行動記録のみ記載する。調査の行動概要については、辻本（1994）の別稿を参照されたい。登山班は、８月５日に、徒歩でパス氷河を横断しラスダール（3360m）へ。

８月６日　パス峰東稜上のポトゥンダス（4065m）。
８月７日　東稜、パス氷河左岸テント地（4000m）
８月８日　パス氷河をさかのぼる。氷河のセラック帯の中間、最高到達点4150mから引き返す。
８月９日　ポトゥンダスに戻る。
８月10日　バツーラ氷河経由パス村に帰着した。
８月11日　全員で専用のマイクロバスに乗って、クンジェラブ峠を越えて中国のタシュクルガン。レイハンと現地で合流した。
８月12日　スバシ経由、徒歩でジュンブラック
８月13日　Ａ班３人はラクダと車でカシュガル。

残りのＢＣ班７人はジュンブラックで調査継続。
8月14日　Ａ班は空路ウルムチへ。
ＢＣ班はジュンブラックで調査継続。
8月15日　Ａ班は空路北京へ。ＢＣ班はラクダと車でカラクリ湖へ移動。
8月16日　Ａ班は空路成田に帰着した。ＢＣ班は車でカシュガルへ。
8月17日　カシュガルで調査。
8月20日　Ｂ班は空路ウルムチ経由、帰国の途。
8月22日　Ｃ班は空路ウルムチへ移動。
8月27日　Ｃ班は空路北京へ移動。
8月30日　Ｃ班は空路成田に帰着した。
9月６日　最後の隊員川崎、成田に帰着した。

## 4　20年前のフンザ

本稿では、今回の調査における著者の個人的な視点からの見聞を報告したい。なお調査の全容については、個々の観点からの報告が別個に公表される予定であるので、それらを参照されたい。著者が今回の調査で個人的に立てた目標は、20年という時間を隔てて見えるフンザの社会変容である。

前回フンザを訪れたのは1973年。今は昔となった印パ紛争の直後である。パキスタンは、インドと戦って負けた。その戦後まだまもない頃だった。

フンザはパキスタン・インド・中国の３国の国境地帯に位置するため、カラコラム山脈ぞいの国境そのものが未確定な北部辺境では、外国人の立ち入りを禁じていた。したがって歴史的文献を除けば記録は乏しく、島澄夫による予察（島、1962）が比較的最近の記録としてあるぐらいで、フンザには入国できないとされていた。

筆者は、1973年の２月から６月までネパールでの登山（京都大学学士山岳会によるヤルンカン峰8505mの登山）に従事した。同行した山岳部の同回生である高木真一とともに、かねてからの計画どおり、だめでもともとのつもりでパキスタンに入国した。まさにちょうどそのときに、歴史の歯車がことりとまわって、北部辺境のフンザがパス村を北限として外国人の立ち入りを許可した。わたしたち２人は、永年にわたって閉鎖されていたフンザにはじめて入る外国人になった（松沢・高木、1973）。

われわれが撮影し公表したフンザ・カラコルムの写真は、当時未知の未踏の山々を人々に紹介することになった。バツーラ、シスパーレ、ウルタル、パス、ルプガルサール、モムヒルサール、トゥポプダンなどである。

たとえばフンザ・カラコルムを代表する高峰「ウルタル」は、われわれが現地で採集して命名した山名なのだが、その呼称はその後、国内外の山岳界に定着した。グランドジョラス北壁冬期単独初登で有名になった日本を代表するクライマー長谷川恒男が、後年そこで墜死した山である。満足な地図のない時代だったので、「岩と雪」に報告された現地で聞き書きした地名は、今も生き残っている。

高木とわたしは、フンザ周辺の山を見てまわった。最終的にはパス村に滞在して、パス氷河からシスパーレ峰（7619m）の登路の偵察をおこなった。登山の記録は別稿を参照されたい（松沢・高木、1973）。

20年前、フンザの人々にとってわれわれはきわめて珍しい存在だった。外国人など見たことがない。はるか昔のドイツのバツーラ遠征の頃にポーターに出した証明書をもって人がやってきた。もちろんわれわれにとっても物皆すべて珍しかった。

よく中国人とまちがわれた。それは、中国とパキスタンを結ぶ交易道路カラコルム・ハイウエイ（略称ＫＫＨ）が建設中で、たくさんの中国人労働者が入っていたからだ。西アフリカ・ギニアのコナクリでもそうだったが、中国の対外援助は、労働者を送り込んで道路とか体育館とか、人々の眼に直接ふれるものを建設する。金だけ出したり、ＯＤＡという名のヒモつきで日本製品を買わせる援助と違って、援助に対する地元の人々の認識も評価も高い。

ＫＫＨの道路はまだ全面的には開通していなかった。国境も固く閉ざされていた。ギルギットからフンザの中心カリマバードまで、インダス川の最上流部の断崖の細い道をジープでさかのぼっていった。フンザの北縁のパス村にチェックポストがあって、そこで行き止まりになっていた。だから20年前のフンザには、陸の孤島という趣があっ

た。

フンザは、パキスタン政府が統治しているとはいえ、まだミール（土着の王様）の支配する土地だった。フンザの中心地カリマバードに、政府の観光局が運営する旅行者用のレストハウスが1軒だけあった。2部屋しかなかった。着いてすぐ、高木と2人で、ミールを宮殿に表敬訪問した（図1）。じっさいに王宮に王様とその一族が暮らしていた。タイムスリップした感じがする。今はいったいいつの時代なのだろう。王様の暮らしは、100年前もきっとこうだったに違いない。

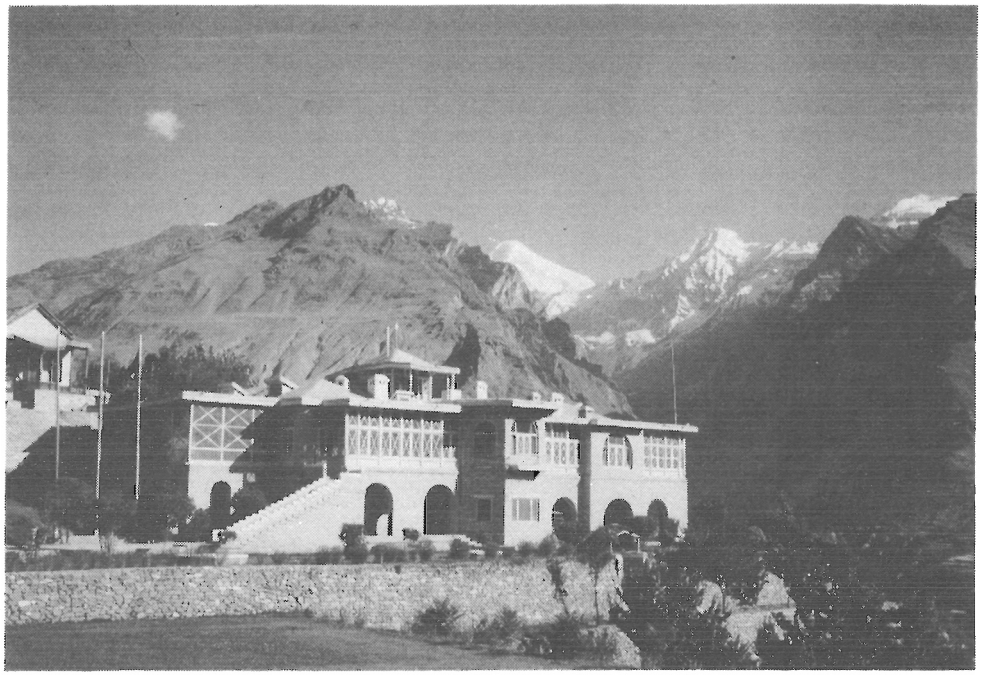
フンザの中心地カリマバード付近の人々は、ブルシャスキー語という特異な言語を話す。フンザ北部のパス・グルキン・フサニ・グルミット村はワハン語になる。フンザ南部からギルギット方面のインダス川下流域はシーナ語になる。民族的にも言語的にもさまざまな要素が入り組んでいるが、全体としてフンザはひとつのまとまりをもっている。

フンザがひとつの社会的なまとまりをもつ2つの理由が考えられる。①イスラム教のイスマイリ派に属するという宗教的背景、②パキスタンの中央政府からの援助の手薄い北部辺境という政治的背景、である。政府はあてにできない。宗教心で結びついて、自分たちの暮らしは自分たちで支えなければならない。

登山の基地としたパス村は、まわりを5000m級の鋭峰に囲まれている。パス氷河の末端部のモレーン（氷河が運んだ堆積物）に開けたオアシスである。1973年当時、戸数は約30戸だった。りんごとあんずがたわわに実っている。村に旅人のための宿泊施設はなかった。村にひとつの小学校の先生をしていたハキカット・アリの家に泊めてもらった。灯油のランプが石を積み上げて作った家の壁を照らしていた。

20年前のフンザの旅で最も濃密につきあった人物は、同行の高木真一と、パス村で出会った学校教師ハキカット・アリだった。アリとの出会いは驚きだった。山奥の小さな小さな貧村の、たったひとつの小学校のたったひとりの教師である。だが英語は流暢にしゃべるし、知識も豊富で的確だった。毎日、英語のラジオ放送を聞いていると言っていた。インテリゲンチャというかんじである。知識をひけらかすようでやや鼻持ちならないところはあったが、彼をとおして、シスパーレ峰の登路の偵察にかかるすべてのアレンジをおこなっ

図1　フンザのミールの一家（1973年）。左端は高木真一。その隣がミール、王妃、2人の王女。



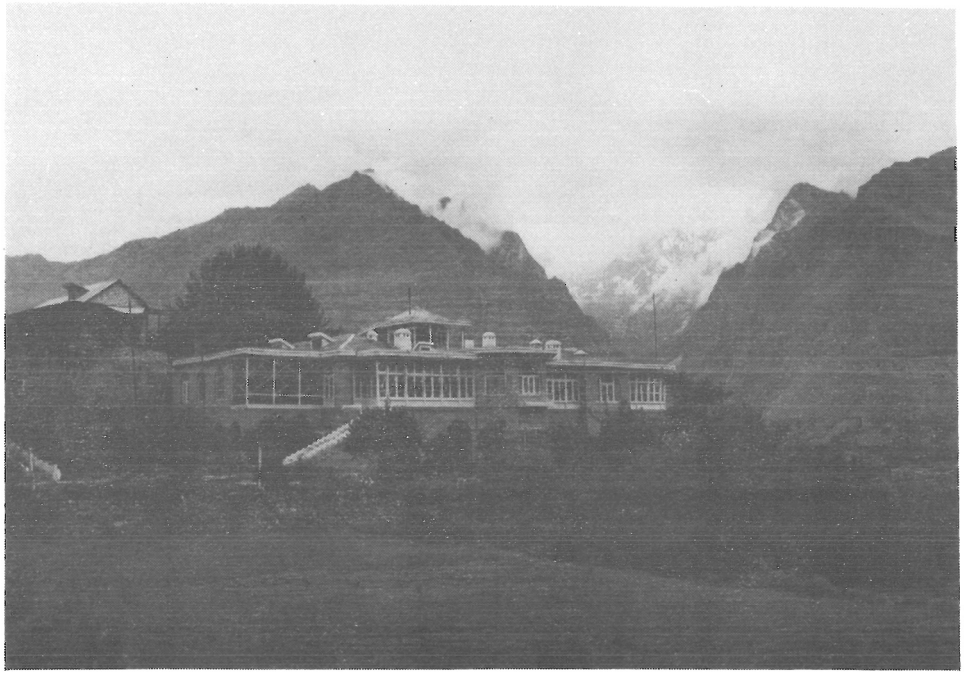
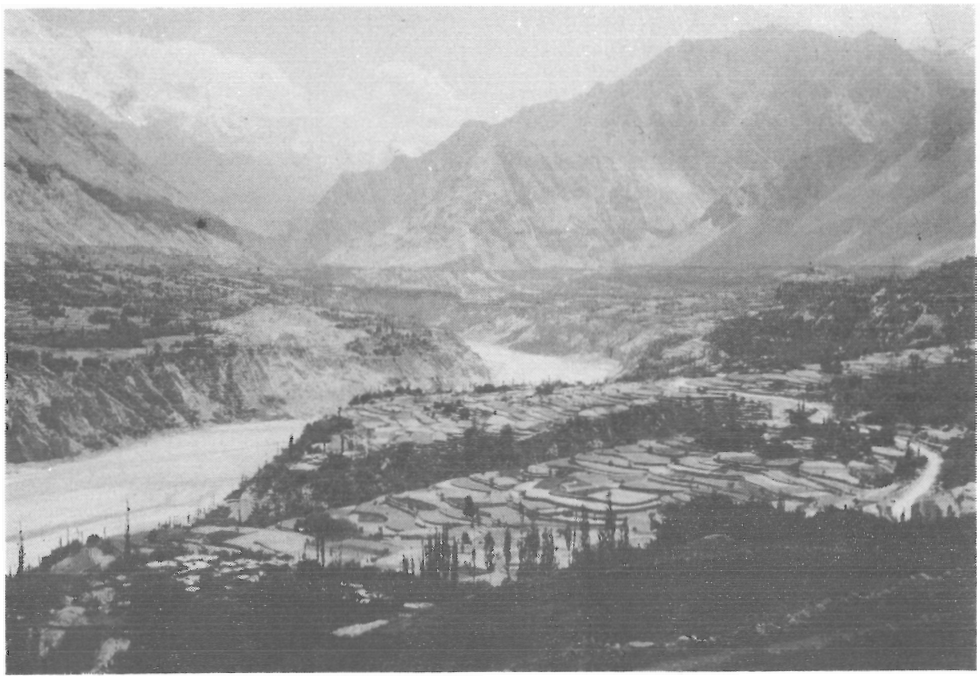


図２　ミールの宮殿、1973年と1993年。



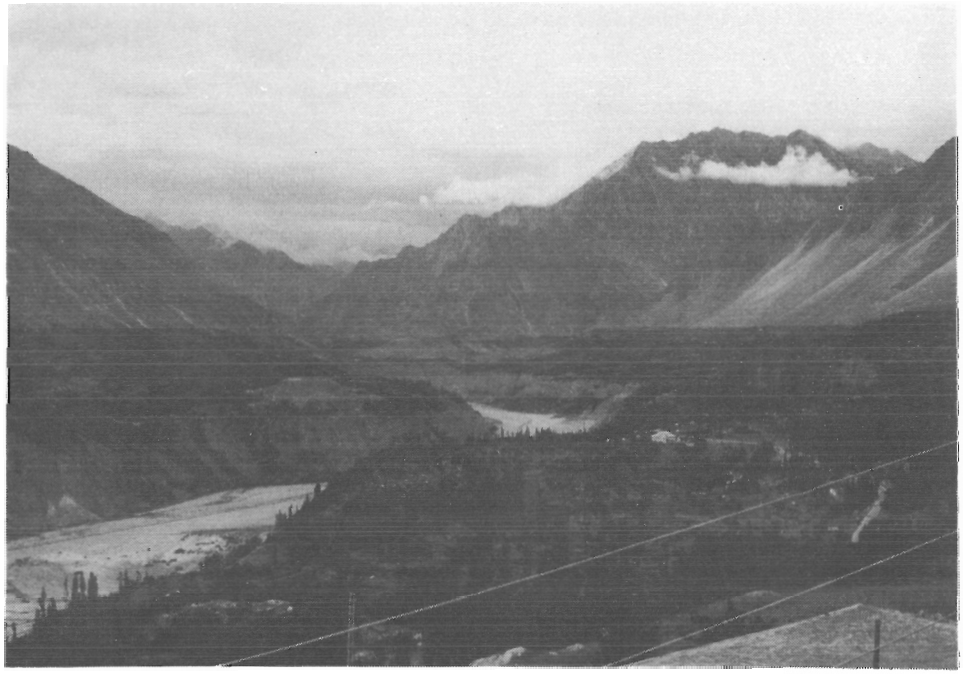


図３　フンザの中心カリマバードからフンザ側の下流ラカポシ峰の方を見る、1973年と1993年。

た。

## 5 20年後のフンザ

この20年の間に、フンザにいろいろな変化があった。しかし、遠く日本にいてわかることは限られていた。登山でいえば、バツーラ、シスパーレをはじめ、めぼしい未踏の峰はすべて登られてしまった。ずいぶん入りやすくなっていて、秘境フンザの観光ツアーなどといった旅行企画も眼にするようになった。そこに住む人々はどんなふうに変わったのだろう。ちょうど20年ぶりに訪れたフンザは、一見してのどかな桃源郷の雰囲気を残していた。際だった変化と、それでも変わらないものとを箇条書きにしてみる。

### 1）ミール制の廃止

フンザの中心地カリマバードの丘の上のミールの宮殿からは、正面にディランが見える。北杜夫の「白きたおやかな峰」の舞台となった山である。宮殿のたたずまいは何も変わっていなかった。この20年のあいだに木だけが確実に成長していた(図2)。しかし、高木とわたしが面会したミールや王女たちの姿はなかった。フンザにおけるミールの支配は完全に終わっていた。王宮は旅行者用のホテルに変わっていた。宮殿の裏の墓地にミールは葬られていた。イスラムの風習に従い、遺体は横臥して、顔はメッカの方角に向いているという。

フンザの人々にインタビューしてみると、ミールの時代をなつかしむという人はいなかった。変わるべくして変わった、民主的になった、そういう感慨をもらす人が多かった。

### 2）観光ビジネスの成立

かつてたった1軒だけのレストハウスは、今もそこに建っていた。だが、カリマバードやアリアバードには、たくさんのホテルやインができていた（図3）。数十軒もある。今回の旅自体がそうなのだが、日本の旅行社と提携したパキスタンの旅行社がツアーのすべてを手配する。ツアーリズム（観光）がしっかりとビジネスとして成立している。

今回のパキスタン側の旅行社の社長はナジル・サビブである。世界第2の高峰K2（8611m）をはじめ4つの8000m峰に登頂したフンザ出身のパキスタンの英雄である。1991年10月にウルタル峰で長谷川恒男が雪崩に流されて墜死したときのパートナーだった。イスラマバードで出会った彼は、強い意志と諦観とが共存したようなふしぎなまなざしをしていた。控えめで暖かくて強い。ナジルは一族の手を借りて北部辺境のツアーをビジネスにして、それなりに富裕な実業家になっている。1994年最新のニュースによれば、地方議員に当選したという。実業家としてだけでなく、今後は行政家としても、フンザのために活躍するのだろう。

ヤク・ウシ・ヒツジ・ヤギの放牧と、大麦・りんご・あんずなどの農業が、フンザ周辺の村人の生業である。パス村の郊外では、アガ・ハーン財団の援助で、氷河からひいた潅漑用水で新しい農地を作っていた。それにしても、過酷な自然環境のもと人口の収容力にはおのずから限度がある。人材を外の世界に送り出すほかない。しかし、カラコルム・ハイウエイ（KKH）の貫通によって、事情は急速に変化している。

パキスタンの辺境は、対中国でいえば、逆に対中交易の前進基地ということになる。毎日、トラックに満載した中国の雑貨が流れ込んでくる。物資の流入だけではない。中国経由で人も入ってくる。かつて「桃源郷」と呼ばれたフンザの観光資源としての価値が、KKHによってアクセスが容易になり、急速に高まっている。

パス村でさえ3軒のホテルがあり、もう1軒も建設中である。カリマバードはさらに観光地化がすすんでいる。実際、ラカポシ、ディラン、バツーラとカラコルムの雪をいただいた高峰がそびえ、あんずが枝もたわわに実っている。その風景とスケールは、ヨーロッパ・アルプスでも味わえない。

夏の最盛期には、連日、アメリカ、ドイツ、イタリア、フランス、日本からの観光客が訪れていた。フンザでは観光がビジネスとして定着しつつある。山間で飛行場の無いフンザでは、それもこれもすべてKKHという道のおかげである。

道路が人々のくらしを変える。ネパールの山地でも、アフリカの最奥の村でも事情は同じだ。そして、どちらかというとこうした現代文明の急速

図4　パス氷河末端部に開けたパス村の全景。

な流入による混乱、拝金主義の横行ばかりが目につくのだが、フンザは例外のようだ。自らの文化や自然に対して、自覚的にそれを守っていこうという姿勢が顕著である。

### 3）パス村に電灯がともる

20年ぶりに訪問したパス村は、一見したたたずまいは変わらないが、内実はずいぶん変化していた（図4）。まず、電灯がともる。夜、蛍光灯に明るく照らされた室内は、昔を知る者にとって大きな違和感があった。数年前に、フンザ川の上流のカイバー村に水力発電所ができた。下流の大きな街ギルギットまで延々と電線がひかれ、その恩恵にあずかっている。

プロパンガスも使われていた。あいかわらず薪ストーブが主なのだが、ちょっとした煮炊きには便利なガスを使うようだ。村の戸数は74戸に増えていた。たしかに、薪だけではとうていこれだけの口を養えない。内陸の乾燥地で、オアシスの外にはほんのわずかしか木が生えていないからだ。しかし電気やガスにはお金がかかる。かつては自給自足の村が、しっかりと貨幣経済に組み込まれていた。

ハキカット・アリは、1年前に心臓発作で亡くなっていた。まだ50歳前だと思う。20年前われわれとパス氷河に行ったとき、それがアリには初めての山旅だった。その後、トレッカー（山旅をする人）が増えたのだろう。彼はなんとトレッキングにかんする本を2冊も書くまでになっていた。最初の本である「Trekkers Guide to Hunza」は、1986年に発行され、87、88年と毎年改訂されていた。

### 4）山岳ガイドという職業の成立

アリの本をめくっていて驚いた。1973年7月26日付けでわれわれが与えた登山ガイドとしての彼の推薦状が、麗々しく本にのっているのだ。なつかしくも高木の筆跡である。高木は翌年1974年9月に同じカラコルムのK12峰（7473m）に初登頂後、遭難死亡した。

パス村で、20年前の踏査行に同道したポーター（荷物運びの人夫）の1人サナ・カーンに出会った。彼の息子は、現在、パス村で山岳ガイドを職業にしていた（図5）。パキスタン政府がライセンスを発行している。この20年のあいだに、山岳ガイドなどという職業が確立していたのである。

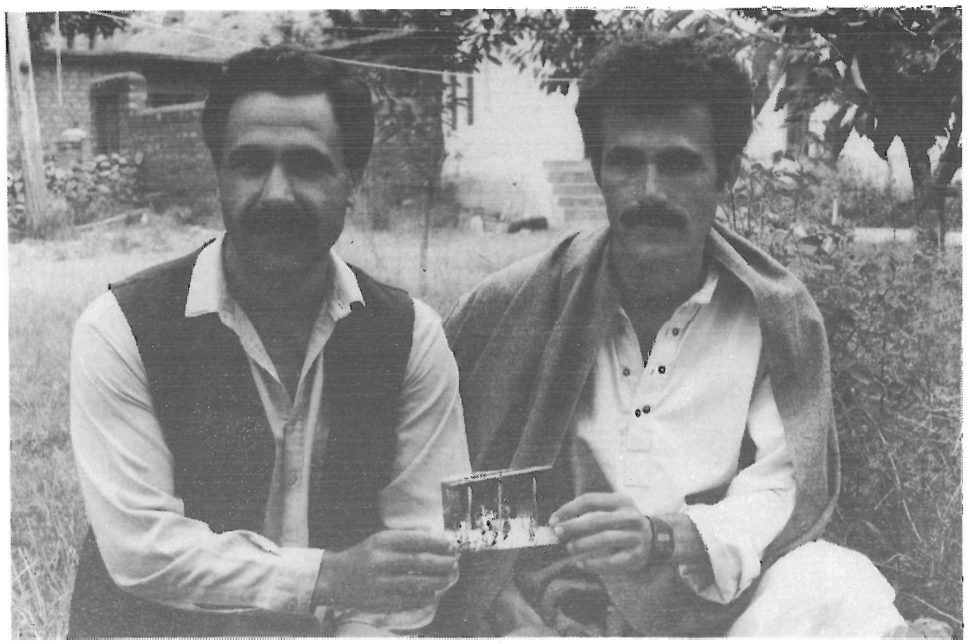


図５　20年前の子どもの頃の写真を手にもつ２人の兄弟。

今回のフンザの旅で最も多く時間をともにしたのは、パス氷河の再度の踏査に同行した川崎公男と、パス村で雇ったその山岳ガイドのカマルジャンである。川崎はかつての高木と同じ医学部の５回生。カマルジャンは、ナジル・サビブが推薦したのだが、老練ですばらしいガイドだった。

川崎とカマルジャンと３人で、パス氷河源頭のシスパーレとパス・ピークのコル（鞍部）をめざした（図６、図７）。日程は一週間しかない。1973年の偵察をもとにパス・ピーク東稜をたどり、パス氷河上部に降りてアイスフォール帯を登った。氷河の登行は、技術的な困難はないがクレバスが深く迂回がたいへんだった。けっきょくたいして高度もかせげぬまま、標高約4150mで、時間切れで撤退した。

だが、カマルジャンとテントをともにした暮らしは快適で楽しかった。ネパールのシェルパに劣らぬ山岳ガイドとしての資質が認められる。

カマルジャンの生年は不詳、50歳台の半ばだろう。１人の妻とのあいだに４男１女をもうけた。娘は嫁いで孫が２人いる。長男と次男はカラチの大学で勉強している。月々の仕送りが800ルピーと500ルピー。１ルピーは約４円だから、全部で5000円ほどとはいえ、パキスタンの所得からみるとたいへんな負担である。それをまかなえるだけの収入が山岳ガイドという職業から得られるともいえる。（図８）

**５）教育への熱意**

カマルジャンの例に限らず、フンザ全体にいえることは、たいへん教育熱心ということだ。公立の学校の他に私立の学校が少なからずある。その一つを訪問した。授業態度は、子どもたちも教師も熱心だ。小学校から英語を教えている。校長の月給3000ルピーよりも高額の給料を払って、英語を教えるスイス人の女教師を雇っていた。外国人教師は、イギリスに本拠を置くＮＧＯのボランティア組織を通じて手配されている。

パスと同規模の隣村グルミットでも、２年契約で若いイギリス人女性が学校で英語を教えていた。戸数が100に満たない、人口わずか数百人の村が英語の外国人教師を雇っている。もっとも彼女が最初の派遣例であり、こうした教育プログラムは90年代に入ってからの急激な変化である。

学校経営の経済的基盤として、フランスのパリに本拠を置くアガ・ハーン財団というイスラム教

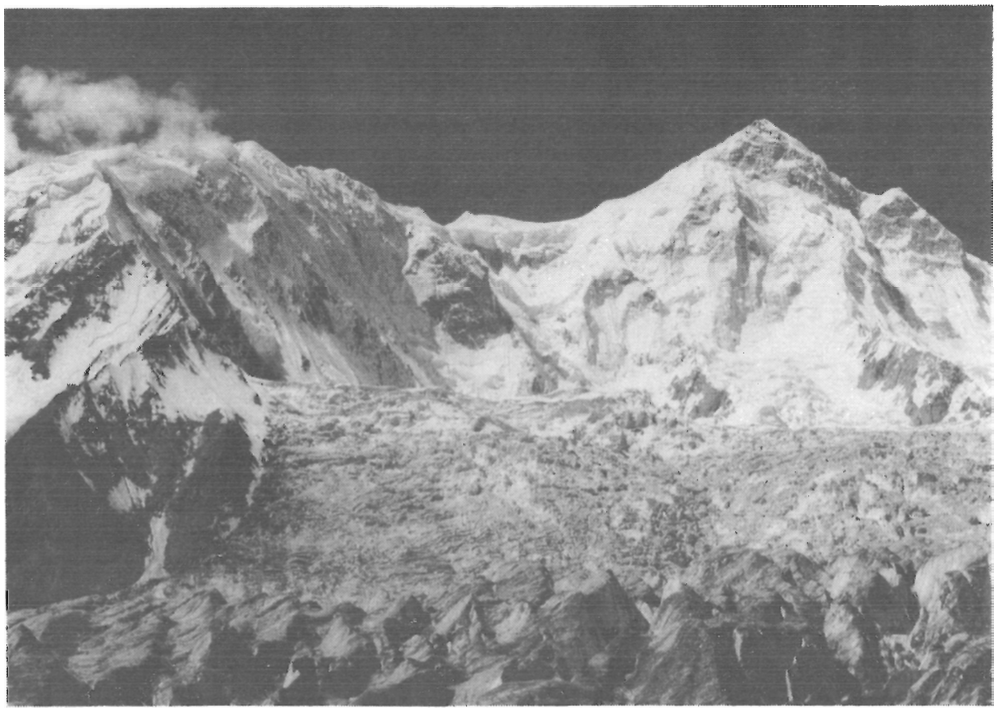


図6　パス東稜上からパス氷河を隔てて仰ぐシスパーレ峰（7619m）。

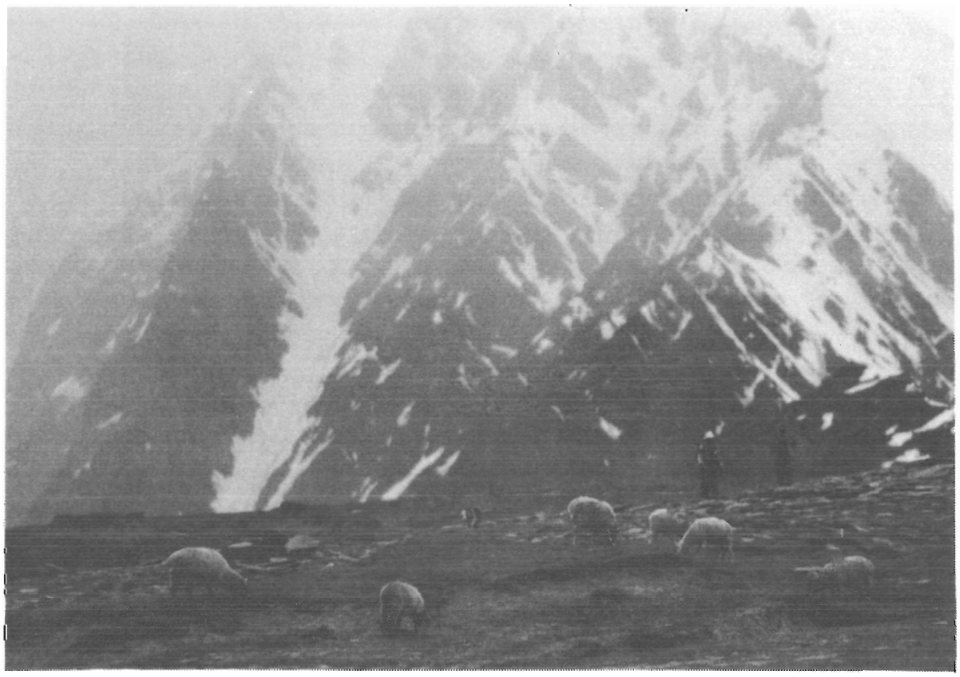


図7　パス東稜上を散策するイギリス人のトレッカーと、放牧されている羊。

図8　カマルジャンの家で、全員集合。

イスマイリ派の宗教法人の財政的な援助が重要になっている。ナジル・サビブのようなフンザ出身の実業家も故郷の人々を援助するために高額の寄付をしている。

それにしても、そもそも地元の人々が教育に熱心でなければ無理な話だ。フンザの中心地カリマバードで面談した私立学校連絡会の長のアマン氏はじめ教師の側の熱意も高かった。政府からは冷遇されている北部辺境で、独自の言語と独自の文化に誇りをもつ民族が、自らの生き残りをかけた教育への投資をしている。

フンザの人々の思い描くライフコースをたどると、優秀な男の子は、カマルジャンのむすこたちの例のように、パキスタンの旧都で経済の中心地であるカラチに出ていく。自由主義経済の国なので、本人に力があれば、よい大学を出て、高級官僚や実業家になる道が拓ける。女の子は、まだそれほど恵まれていない。だが、私立学校には少なからず女の子がいた。近い将来、男の子同様に村を出て行くようになるだろう。

なおフンザにおける学校教育の詳細については、辻本（1994）による別稿を参照されたい。

## 6　フンザからキルギスへ

フンザでの調査と登山活動を無事終えて、標高4900mのクンジェラブ峠を越えて中国に入った。パミール高原である。フンザのような深山幽谷でなく、明るく開けている。ただユーラシア大陸の深奥部という共通点があり、気温の日格差が大きく、乾燥していて、荒涼とした自然環境である。高度はフンザよりも高く、4000mに近い。国境をはさんだ南北で、フンザと比較対照する調査を構想した。

ムスターグアタ峰の山麓のキルギス人の村スバシが当初計画していた調査地である。1989年5月に訪れていて、じっくりと見てみたいと思っていた場所だ。行ってみると、この時期、村人の多くは夏の移牧に出払っていて、村には3家族しか残っていなかった。徒歩で1時間半ほど登った草原に10家族ほどがまとまって、パオ（テント）で生活していることがわかった。そこでわれわれもあとを追って、そのジュンブラックと呼ぶ夏だけの集落のパオに泊めてもらった（図9、図10）。

キルギス人は、中国の新彊ウイグル自治区のさらに西南部の辺境に住んでいる。少数民族である。とくに現在の中国では、(1)中華思想、(2)漢民族

図9　ジュンブラックのキルギス人のパオで。

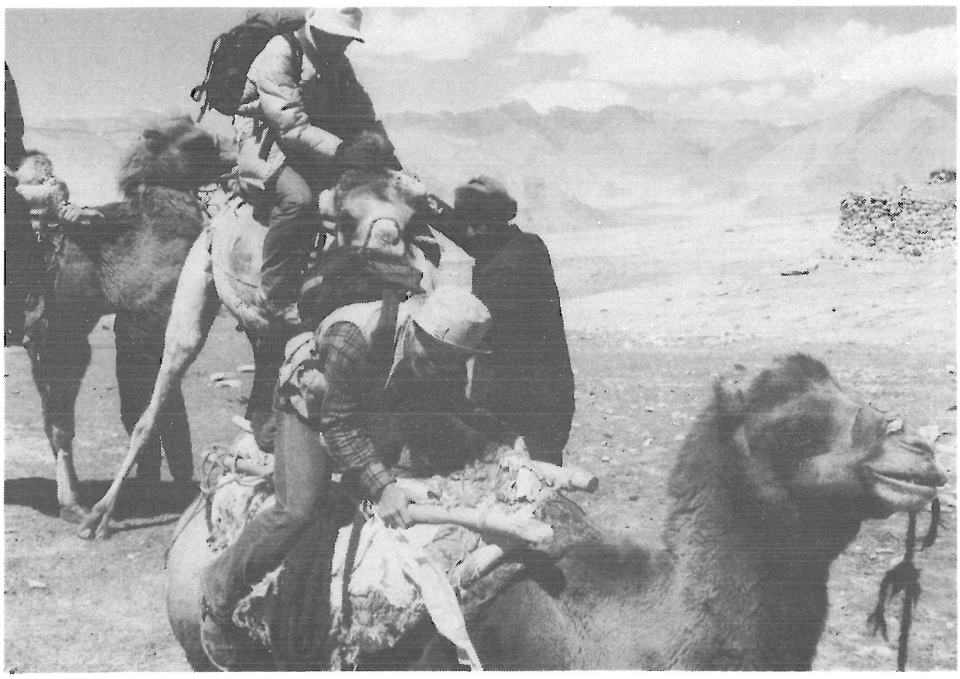


図10　帰路はラクダに乗って。

支配、(3)共産党・官僚支配が徹底しており、いかにも暮らしづらそうだ。北京とは遠く離れているのに北京時間に統一されているので、夜の10時を過ぎないと暗くならない。フンザの人々とは違った政治状況が、キルギスの人々のくらしを大きく規定している。

本稿では、1993年7月から9月にかけての正味約1カ月にわたる今回の調査の概要を述べた。フンザとキルギス、2つの調査地は直線距離でおよそ200kmしか離れていない。ともにユーラシア大陸の深奥部に位置する、辺境の地である。しかし大ヒマラヤ山脈の南北で気候風土は異なり、両者は文化的伝統も社会制度も異なる。それぞれのくらしがどのような環境によって制約を受けているのか。どのような主体的な取り組みが文化的アイデンティティーを保持させているのか。今後さらに検討したい。

## 謝辞

今回の調査は、文部省科学研究費・海外学術調査「高所住民の発達と老化に関する生理学的研究：環境適応とライフコース」(研究代表者：堀了平、課題番号：05041112）の助成を受けた。

## 引用文献

綾部恒雄（1993)「現代世界とエスニシティー」、弘文堂。

梶田孝道（1988)「エスニシティーと社会変動」、有信堂高文社。

川田順造・福井勝義編（1988)「民族とは何か」、岩波書店。

高知大学フィールド医学研究会（1992)「長寿伝説の里」、高知新聞社。

松林公蔵（1992） カラコルム医学学術調査研究概要。ヒマラヤ学誌、3:83-87。

松林公蔵・奥宮清人・戸部隆吉・堀了平（1994a）加齢とエコロジー：フンザカラコルム医学調査 から。学術月報、47(9):16-23。

松林公蔵・瀬戸嗣郎・戸部隆吉・堀了平（1994b）ヒマラヤ低酸素と人体の順応。学術月報、47(2):16-21。

松沢哲郎（1990）ムスターグ・アタ医学学術登山隊行動紀要。ヒマラヤ学誌、1:3-9。

松沢哲郎・高木真一（1973） 解禁後のフンザに入る：パス氷河踏査。岩と雪、34:86-92。

松沢哲郎・松林公蔵（1992） 京都大学ヒマラヤ医学学術研究計画（KUMREH)。ヒマラヤ学誌、2:3-42。

中野秀一郎・今津孝次郎（1993)「エスニシティーの社会学」、世界思想社。

日本・パキスタン協会（1994)「パキスタン入門：文献案内」、日本・パキスタン協会。

奥宮清人（1993） 第2次カラコルム医学学術調査研究概要。ヒマラヤ学誌、4:3-7。

Philipe, A. (1955) Caravanes d'Asie.

Paris:Julliard. アンヌ・フィリップ著、吉田花子・朝倉剛訳、「シルクロード・キャラバン」、晶文社。

島澄夫（1962)「秘境フンザ王国」、二見書房。

辻本雅史（1994） フンザの教育事情と子どもたち、ヒマラヤ学誌、印刷中。

月原敏博（1993）フンザにおける牧畜形態。ヒマラヤ学誌、4:35-46。